

平成二十六年 度

# 日本近世文学会春季大会

## ・大会プログラム

## ・研究発表要旨

期日 五月三十一日(土)・六月一日(日)・二日(月)

会場 上智大学(十二号館一階一〇二・

十号館講堂)

〒102・8554 東京都千代田区紀尾井町七一

後援 上智大学研究機構

一、出欠の葉書を五月七日(水)必着でお出しく下さい。欠席の場合も、名簿台帳の資料といたしますので、必ず投函してください。

一、出張依頼状を御入用の方は、職名・提出先及び期間を明記の上、学会事務局(上智大学文学部)へお申し出ください。

一、大会経費は、参加費千円、懇親会費六千円です。

一、送金は同封の振替用紙(口座番号〇〇一一〇一三一六九五五九九、口座名「日本近世文学会春季上智大学大会」)で、五月十二日(月)までに振り込みをお願いいたします。なお、振替用紙には、必ず内訳を御記入ください。参加費のみの方は、当日会場でも申し受けます。

一、大会二日目(六月一日)日曜日の昼食に弁当(千円)を用意いたしますので、ご希望の方は同封の振替用紙で送金ください。

一、大会に不参加で、発表資料をご希望の方は、出欠葉書の当該欄に御記入の上、同封の振替用紙にて、資料請求代千円を払い込んでください。大会終了後、資料を郵送いたします。

一、三日目(六月二日)の文学実地踏査は、特に専用貸切バス等の用意はいたしません。資料を用意いたしますので、各自・各グループでお回りください。

一、同封の振替用紙による年会費の振り込みはできません。年会費の振込用紙は『近世文藝』の末尾に綴じ込んでいます。

一、宿泊等については、各自、早めにご手配ください。一、お急ぎの御用は左記へ御連絡ください。

日本近世文学会春季上智大学大会事務局

上智大学文学部国文学科 木越治

〒102・8554 東京都千代田区紀尾井町七一

電話 〇三三三三三三三三三三三三三三五

メールアドレス kigoshi@sophia.ac.jp

# 日本近世文学会春季大会のご案内

会員の皆様には時下ますますご清祥のことと存じます。  
さて、平成二十六年春季大会を左記の通り開催いたしますので、ご案内申し上げます。

平成二十六年四月十七日

日本近世文学会春季大会会場校代表 木越 治  
日本近世文学会事務局代表

〔事務局連絡先〕

〒102-8554 東京都千代田区紀尾井町七-1  
上智大学文学部国文学科 木越研究室内  
電話 〇三-二三三八-三六三五  
FAX 〇三-六三六九-四二二七  
e-mail kigoshi@sophia.ac.jp

## 〔会場〕上智大学

〔行事〕 第一日 五月三十一日(土)

委員会 (一八・〇〇〇～一三・四〇〇)

委員会会場 十二号館二階二〇一

大会受付 (一三・〇〇〇)

開会時間 (一三・五〇〇)

研究発表会 (一四・〇〇〇～一六・二五)

研究発表会場 十二号館一階二〇二

1 『修紫田舎源氏』と『柳亭雜集』

2 『雨月物語』の条理を論じ「青頭巾」鬼僧の最期に及ぶ

3 日野資枝の画賛

4 芭蕉のいとど

日本近世文学会賞授賞式・総会 (一六・三〇〇～一七・四五)

懇親会 (一八・〇〇〇～二〇・〇〇〇)

懇親会会場 二号館五階学生食堂

東京大学(院) 金 美 眞  
矢野 公 和  
日本学術振興会特別研究員 田代 一 葉  
白百合女子大学名誉教授 田中 善 信

第二日 六月一日(日)

『近世文藝』一〇〇号記念行事

会場 十号館講堂

受付 (九・三〇)

パネルディスカッション(一〇・〇〇〇～一三・〇〇〇)

1 翻刻の未来 一〇・〇〇〇～一一・二〇〇

司会・九州大学 川平敏文

パネリスト・学習院大学 鈴木健一

2 社会とつながる近世文学 一一・四〇〇～一三・〇〇〇

司会・法政大学 小林ふみ子

パネリスト・日本女子大学 福田安典

立命館大学衣笠総合研究機構専門研究員 石上阿希

ケンブリッジ大学 ラウラ・モレットティ (ビデオメッセージによる参加)

昼 休 み (一三・〇〇〇～一四・〇〇〇)

編集委員会会場 七号館八階国文学科会議室

江戸文学まつり(一四・〇〇〇～一七・〇〇〇) ※一般公開

1 記念講演 一四・〇〇〇～一五・〇〇〇

美人図から産み出される江戸詩文と物語の世界

2 江戸文学と話芸 一五・〇〇〇～一七・〇〇〇

講演 吉備津の釜(上田秋成作『雨月物語』より)

落語 豊志賀の死(三遊亭円朝作『真景累ヶ淵』)

座談会 上智大学 木越 治

日本大学 佐藤至子

神田陽子

隅田川馬石

東京大学 ロバート・キャンベル

神田陽子

隅田川馬石

第三日 六月二日(月)

文学実地踏査 資料を用意いたしますので、各自・各グループでお回りください。

東京都立中央図書館所蔵の『柳亭雑集』(以下『雑集』)と題された四冊本のうち一冊は、『湖月抄』『薄雲』巻から『藤袴』巻までの諸注を抜粋した種彦の自筆抄記である。『雑集』には、項目ごとに『湖月抄』の丁数が記され、さらに登場人物の関係や年齢などに関する種彦自身の覚書が書き加えられている。このような諸注抜粋や覚書は『田舎源氏』二十八編から三十八編までの創作に多く利用されている。その際、諸注は合巻の読者でも理解できるように表現に替えられている。

しかし『雑集』のすべての項目が『田舎源氏』の執筆に利用されているわけではない。例えば、『雑集』には『薄雲』朝顔巻の藤壺の死に絡む諸注抜粋が多くあるが、『田舎源氏』ではこの話は省略されている。それは『薄雲』巻では加持僧の田貫をめぐる話、「朝顔」巻では朝顔の母鉄蔓の話という新しい話を嵌め込むためと考えられる。また、一方では『雑集』に諸注の見えない場面が『田舎源氏』に取り込まれている。例えば、『薄雲』巻の春秋優劣論の場面や「少女」巻の夕霧と雲居雁の惜別の場面などがある。これらは『源氏物語』の主筋ではないため『雑集』に諸注を書き抜くことはなかったが、『田舎源氏』の創作時に趣向として補われたものであろう。

本発表では、種彦が『湖月抄』の抄記である『雑集』によって構想の大枠を組み立て、その上で新たな挿話を組み込んだという『田舎源氏』の創作過程を明らかにする。

## 日野資枝の画賛

日本学術振興会特別研究員 田 代 一 葉

近世中期の堂上歌人・日野資枝ひのすけえだの画賛詠は、子の資矩すけつらが編集した詠草集『先考御詠』(国立国会図書館蔵 絵讃部に、八百十三首(重複を含む)が収められている。詞書から知られる絵の傾向としては、国学者や地下歌人が盛んに詠んだような新奇なものにはほぼ含まれず、四季の景物や富士や松竹、鶴亀など、慶賀性のある伝統的なやまと絵の画題が大半を占め、賛も絵を言祝ぎ唱和する、二条派の温雅な詠み振りであると言える。

画賛は、堂上歌人にとっては余技とも言える私的な詠歌ではあるが、例えば『先考御詠』絵讃部の最終歌には、死期が迫った中、依頼を受けた「関羽」の絵に、苦吟の末、本紙を忠実に模写させたものに下書きをするも、実際の染筆には至らなかつたという経緯が記され、資枝の真摯な姿勢が看取されるのである。

画賛に対する熱意は、古歌を書きつける画賛においても発揮されていて、門弟・石塚寂翁いづかせいくわん記の聞書「和歌問答」には、ある人物から、柳の下に竹む西行の図に「道の辺の」歌の着賛を依頼されるが、寂翁や藤貞幹らと議論の上、この歌は相応しくないとし、『山家集』の別の歌に変更した記事がある。また、門人から依頼された和歌三神像には、送られてきた住吉・玉津島の神像を風景に描き直させた上で、神詠を書きつけて返送している。そこには、与えられた画題を歌学の立場から検討し、その誤りを正すことで、実践的に門人を指導する様子もうかがえる。

以上は、堂上画賛の制作と詠歌の典型を示す好例と考える。

『雨月物語私論』で既に論じたことであるが、この作品の条理の一つに書かないことで表現を完成させる方法があり、その最たるものは叔父子としての崇徳院である。醜悪を意味する名を持つ磯良の容貌は具体的に記されず、髻だけを残した正太郎の最期も描写されていないが、逆にそれ故の表現効果を挙げている。「菊花の約」が赤穴の片恋であり、「軽薄の人」左門の行動は赤穴の意に添うものでないことも同書で既に論じたが、「せめては骨を蔵めて信を全うせん」と母に告げたにもかかわらず丹治を誅殺して逐電した彼は赤穴を葬ってはいない。これらに於いて秋成は敢えて省筆することで表現を完成させたのである。

次に、この作品の霊達は仏教的な意味での常識を越える能力を持たされている。秀次の怨霊は聖地高野山の灯籠堂で酒宴に興じ修羅の闘争を繰り返しており、磯良も「黒き仏」の祀られた「荒野の三昧堂」に正太郎を引き入れており、正太郎の体に書かれた呪文も防禦の役に立っていない。

「青頭巾」の鬼僧が悟りを開いたとの見方もあるが、作品世界の条理はそのようにはなっていない。快庵の威徳が称歎され大中寺が曹洞の霊場として再興されたところのみで、鬼僧の遺骨がどう扱われたのか、その戒名さえ記されていない。これはどう見ても頓悟した者に対する扱いはない。にもかかわらず秋成はここに、食人鬼の「死と再生の神話」を創出したのであると考えられる。

## 芭蕉のこゝろ

白百合女子大学名誉教授 田 中 善 信

病雁の夜さむに落て旅ね哉  
海士の家は小海老にまじるいとど哉

『去来抄』によると、芭蕉は右の二句のうち一句を『猿蓑』に入れるように、撰者の去来と凡兆に要請したという。この二句は季題も異なっており、一見したところ内容も大きく異なっているように見える。したがって二句とも入集させても何の問題もなさそうだが、二句とも入集させることを芭蕉はためらっていたのである。

ためらっていた理由については何も記されていないが、このことについては南信一氏が言うように(『総釈去来の俳論(下) 去来抄』)、「この二句は共に蟹の苦屋に病臥して、旅の孤愁を侘びた句であった」からだと考えるほかはなからう。つまり芭蕉は同じ心境をまったく違う表現で詠みわけたということである。

ごくおおよざっぱに言えば「病雁」の句は重厚であり格調が高く、「いとど」の句は軽妙でありかつ平明である。芭蕉はこの二つの句を得て、いずれを取るかみずから決断できなかったということである。当時の芭蕉は新風を目指しながらなお試行錯誤の状態にあったと思われる。

「いとど」の句を私は、病床でいとの鳴き声を聞きながら秋のわびしさをかみしめている心境を詠んだと解釈しているが、この解釈にしたがって、当時芭蕉が目指していた新風について考えたい。

## パネルディスカッション1 翻刻の未来

コーディネーター 九州大学 川平敏文

近年、古典籍のインターネットによる公開が進み、擬似的にはあるが「原本」の閲覧が容易になってきている。このような状況に応じて、我々は、翻刻とはいかにあるべきかを改めて論じる時期に来ているのではないかと。

たとえば、以前は原本の閲覧が容易にできないものも多く、「原本に忠実」といった翻刻姿勢が一定の意味を持ち得たが、影印本やネットでその全画像が見られるような場合、その意味は問い直してみる必要があるだろう。多くの場合、「原本に忠実」な翻刻・引用文は、現代人にとって読みにくい。それよりも、より読みやすい本文を提供すべきだという立場がある。反面、自覚的に原態を残すという選択肢もありうるが、それはどのような場合に必要になってくるのか。

翻刻という営為は一種の解釈であるから、翻刻による本文の「加工」がどのレベルまで許されるのかという判断は、対象とするジャンルや、個々の研究者間でもまちまちであろう。このことについて、まずは研究者を主たる読者対象とした場合、ついで一般読者（大学生をふくむ）を主たる読者対象とした場合について考えてみる。

もとよりこのシンプジウムでは、統一的な翻刻のガイドラインを示そうというわけではない。研究環境の歴史的变化についての認識を共有するとともに、これから直面するであろう具体的な問題について意見交換し、それぞれの今後の研究に生かしてもらおうというのがその趣旨である。

司会

九州大学 川平敏文

パネリスト

学習院大学 鈴木健一

尾道市立大学 藤澤毅

## パネルディスカッション2 社会とつながる近世文学

コーディネーター 法政大学 小林ふみ子

近世文学研究において、無自覚な近代主義に立つことなく、近世の人々の価値基準にできるだけ即して行おうということは、この半世紀余で浸透してきた。その理念を共有する学芸員のなかで「正しい文学史が模索され、その人々のみに向けた研究が重ねられてきた。一方、その外側を想定した著作は研究とは異なる普及活動として個人の努力に委ねられてきたのではないか。

「研究」とはそれだけなのか。いろいろの意味で斜陽ぶりが明るみに出つつある今、「研究」の視点を問い直し、現代社会の文脈で必要とされる研究とは何かを考えてはどうだろうか。

福田氏による「和本リテラシーの問題―書家・三輪田米山の日記紹介について」、石上氏による「春画を展覧するということ」、およびモレット氏による「非小説の文学史の重要性―世界文学の視点から見た日本近世文学」（ビデオメッセージ）という三つの事例に基づく問題提起をうけ、我々が現代社会に対して何を提示できるのかを考える。従来の文学史の枠組みから捨象されてきたものなかに、地域の人びとのアイデンティティを支える、現代人の意識や価値観、文学観に再考を促すなど、広く現代社会、世界の視点に立てば注目される課題があるかも知れない。視点を變えることで光のあたる作者や作品ジャンルがあり、それが近世文学の研究そのものをも豊かにするであろう。和本リテラシー活動もそこではじめて意義づけられるのではないだろうか。

司会

法政大学 小林ふみ子

パネリスト

日本女子大学 福田安典

立命館大学衣笠総合研究機構専門研究員 石上阿希

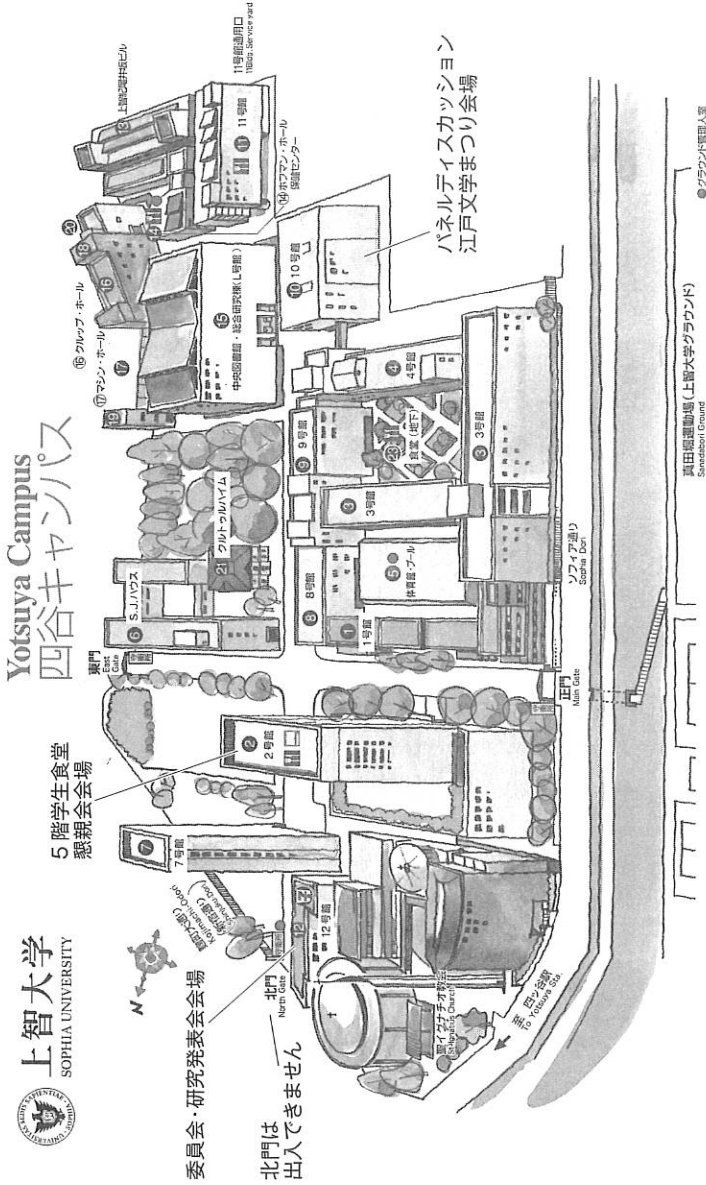
ケンブリッジ大学 ラウラ・モレット氏（ビデオメッセージによる参加）

## ■アクセス

### ■大学へのアクセス

JR 中央線・総武線・地下鉄丸の内線・南北線

四ッ谷駅下車、徒歩3分



Yotsuya Campus  
四ッ谷キャンパス

上智大学  
SOPHIA UNIVERSITY



5階学生食堂  
懇親会会場

委員会・研究発表会場

北門は  
出入りできません

バネルデイスカッション  
江戸文学まつり会場

新田橋通車場 (上智大学クラウンランド)  
Shintanihama Station

●クラウン外観入道